

野辺地の歴史



尖頭器

寒冷な氷河期もおわり気候が徐々に暖くなる今から1万3千年前、日本列島に住む人々は土器を作りはじめます。縄文時代のはじまりです。明前(4)遺跡や向田(33)遺跡からはこの時代(縄文時代草創期)の尖頭器(槍先)などの石器がみつかり、



漆塗木製品 (5,500年前)

野辺地の歴史は少なくともこの時代までさかのぼります。このほ(13,000年前)か野辺地には縄文時代前期の漆塗木製品のみつかった向田(18)遺跡、中期の槻ノ木(1)遺跡、後期の板状立脚土偶がみつかった有戸鳥井平(4)遺跡、晩期の有戸鳥井平(7)遺跡など数多くの遺跡があります。川をさかのぼるサケ、海の魚介類、森から得られるクリやドングリなどの食糧資源に恵まれた豊かな自然環境のもとで、縄文時代の人々の生活が1万年以上つづきました。



板状立脚土偶 (3,500年前)

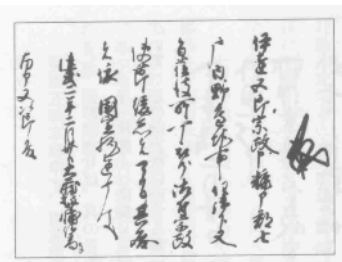
米作りの始まる弥生時代。向田(29)遺跡からは、その当時の住居の跡や米がみつかり、稲作に向かない気候のためか遺跡数は減少します。



二十平(1)遺跡の堀の跡 (平安時代)

奈良・平安時代、大和朝廷は東北地方に住む人々を蝦夷と呼んでいました。朝廷軍と蝦夷との戦いや蝦夷どうしの戦いが何度もありました。人々は調理のためのカマドを備えた竪穴式の住居に住み、10世紀後半には堀で囲まれたムラも現れます(環濠集落)。二十平(1)遺跡はムラを二重の堀で囲んだ環濠集落です。

野辺地という地名は、ヌップペツ(野をながれる川、ペツは大きい川を意味する)というアイヌ語だという説と海岸に沿って延びた広い原野を意味する延地(のべち)からきているという説があります。この地名が記録に初めてみえるのは建武2年(1335)のことです。後醍醐天皇により陸奥守として東北に派遣された北畠顕家が、糠部郡の郡奉行であった南部師行に於てた文書に、「七戸内野辺地」を伊達五郎宗政に与えるようにと書かれたものがあります。糠部郡とは、現在の青森県東部から岩手県北部までの広大な地域です。以後、江戸時代の終わりまで、この地域は南部氏の領土でした。



建武2年の文書 (野辺地という地名の初見)

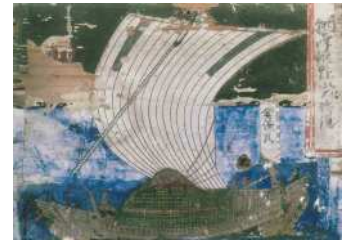
戦国時代に津軽氏が南部氏から独立し、現在の青森県の西半分が領土となると、南部氏にとって野辺地は津軽領に接する重要な地域となり、江戸時代には代官所や馬門番所(南部領と津軽領との間を通行する人々や物資の出入をとりしめる役所)などの施設が設けられました。

この時代になると各地の特産品が船で大量に輸送されるようになります。下北半島や野辺地の湊には、木材(ヒバ)を求めて北陸地方や蝦夷地(現、北海道)松前などから多くの船が訪れるようになりました。



南部領・津軽領の境界につくられた藩境

さらに明和3年(1766)には、南部領尾去沢^{おさりざわ}鋤山(現、秋田県鹿角市)から産出される銅を野辺地湊から大坂まで運ぶことになりました。この銅は江戸幕府によって長崎貿易に使われ、御用銅と呼ばれました。御用銅を運ぶ船には南部領の特産品の大豆や^{しめかす いわし}粕(^{こようどう}蕪の粕で畑の肥料となった)も積まれ大坂で販売されました。



船絵馬(ふなえま)
航海の安全を祈って
神社に奉納された

野辺地には多くの商人が移り住むようになり、やがて自ら船を持ち航海に乗り出す商人も現れます。この船は日本海や瀬戸内海を航海し、各地の湊で商品の売買をしていたので、船頭はすぐれた航海術とともに商才も必要でした。野辺地湊には、塩、古着や木綿、酒、紙などさまざまな商品がもたらされ、南部領の各地に運ばれていきました。このように江戸時代の野辺地は盛岡藩の日本海航路(西廻り航路)への窓口として発展しました。



客船帳(町指定有形文化財)
野辺地湊に訪れた船の名簿

明治元年(1868)の^{ほしんせんそう}戊辰戦争のとき、東北地方の各藩は新政府軍と旧幕府軍のどちらを支持するかという決断をせまられました。結果的に旧幕府軍を支持することになった盛岡藩・八戸藩と新政府軍を支持することになった弘前藩・黒石藩は9月22日に野辺地で戦いました。のちに野辺地戦争と呼ばれるこの戦闘は翌朝まで続き、弘前藩と黒石藩は多くの犠牲者を出して退却しました。



野辺地戦争戦死者の墓所
(県史跡)

野辺地に響いた砲声は、新しい時代の夜明けを告げるものでした。明治3年(1870)、この地方には^{あいづ}会津(現、福島県)の藩士とその家族が移り住み斗南藩ができるなど、いろいろな移り変わりをへて明治9年(1876)に現在の形の青森県ができます。

明治時代になると北海道の開拓が本格的に始まります。野辺地の商人は、味噌・^{みそ}醤油をつくり、野辺地湊から北海道へ運び販売しました。銀行や^{かんづめ}罐詰などの工場もできました。しかし、物資を大量に運ぶ手段は、^{はんせん}帆船から大型蒸気船へと変わりつつありました。さらに明治24年(1891)には日本鉄道の盛岡-青森間が開通し、駅周辺に新たな市街地ができる一方で、湊町として発展してきた野辺地は大きな転換期をむかえることになりました。江戸時代から明治初期までにたくわえられた資金で、時代の変化に対応した新しい商いや産業を生み出す必要がありました。



日本最初の鉄道防雪林

明治以降、野辺地は教育や文化活動に県内では^{せんくてき}先駆的な役割を果たしてきました。明治6年(1873)に野辺地小学校が開校、大正15年(1926)には町民の熱意が^{みの}稔り県立野辺地中学校が開校するなど教育に力をそいできました。また、俳句結社の^{ささなきかい}笹鳴会は、明治36年(1903)に県内初の俳句同人誌「菅菰」を創刊しています。



大正時代の野辺地本町